都会化思考と、田舎思考

最近のベストセラーである養老猛司の著書は、いわゆる新書版の「バカの壁」を始め何冊か目にした。目にする内に、新書版でなく体系的な著書を目にしたいと思っていたら、著者が「教科書用に纏めた」という「人間科学-筑摩書房-」が目に留まり読んだ。

教科書用なだけに、専門用語も多く、著者曰く、「もちろん読んでいるほうは、さっぱりわからないかもしれない。」そのものの感であった。

しかし、このことは、著者の云わんとする私の脳が都会化思考であり、自然を相手にする「田舎」思考が、お粗末ということであろうか。

例えば、自然界の性の決定は遺伝子のなせる業と私は思っていたが、「ハナダイのような極端な場合は、群れの先頭を泳ぐ個体が雄であり、あとに従う個体はすべて雌である。この雄個体がなんらかの事情で失われると、群れの先頭を泳ぐ個体が雄に変化する」。また、ヒトはどうして右利き？

正に私には、？？？？？？である。

情報化（記号化、シンボル化）は脳の機能であり、身体機能こそが、唯一の生物としての個体であり、それ故に生物である身体の細胞は常に作り変えられており、一時として同じでない（固定化していない）という。先祖は、自然に対して、「手入れ」という自然との「折り合い」思想を作りあげてきたという。「バカの壁」とは、この「都会化」思考を揶揄しての書名と思われる。

また、著者は、「ヒト」、「人間」、「人」を使い分けてもいる。「ヒト」は生物学的規定であり、「人間」とは社会的に規定されたヒトであり、この両者の意味を含んだ、もっと広い意味が「人」という。

「ヒト」の問題から「人間」を見つめようというのが、「人間科学」ということか。

ついてながら、もともと中国語では「人間」とは世間を意味し、それ故か漱石時代には意識して「ジンカン」と読ませ、「人間（ジンカン）に交わる」と表現していたとか。「人間の問題」を考える時、この「ジンカン」のニュアンスの方が適切かなと興味深い表現である。

（2004 年 09 月 13 日 記）